

棚尾まちづくり事業

平成 23 年 12 月 20 日（火曜日）

## 第 6 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

- 1 前回までのテーマに関する参考意見など  
棚尾橋、源氏橋、棚尾港、藤井達吉、棚尾駅など
  
- 2 テーマ 11 「棚尾村の瓦屋」
  - (1) 資料説明（杉浦光雄）
  
  - (2) 出席者による補足説明、感想など
  
- 3 テーマ 12 「加藤平五郎」
  - (1) 資料説明（磯貝国雄）
  
  - (2) 出席者による補足説明、感想など
  
- 4 連絡事項・情報交換など
  
- 5 次回日程  
第 7 回 1 月 26 日（木曜日）午後 7 時から  
「江戸時代の棚尾村村勢」 「棚尾の郵便」

## 棚尾村の瓦屋

「棚尾村明細帳」にみえる瓦屋

### 【寛保二年村明細帳】

一七四二年

瓦屋の記載なし

名古屋の瓦は開府以降伊勢の業者が優勢であったが、江戸時代中頃から西三河の業者が優勢となった。これは西三河の粘土が豊富であったからだろう

### 【宝暦三年村明細帳】

一七五三年

瓦屋の記載なし

### 【宝暦十二年村明細帳】

一七六二年

庄次郎

### 【明和七年】

一七七〇年

庄三郎

### 【天明二年村明細帳】

一七八二年

善助

孫八郎

庄太夫

庄蔵

文蔵

### 【享和元年村明細帳】

一八〇一年

庄蔵

吉助

金三郎

庄太夫

新吉

伝兵衛

(李兵衛・どう古屋)

【天保十二年村明細帳】

一八四一年

李兵衛

倭三郎

善八

利八

糸助

十兵衛

幸右衛門

その他の資料にみえる瓦屋

一、豊田市野口町（挙母から足助にいたる街道の左側）増慶寺庫裏の瓦。

三州棚尾村瓦屋喜平、作者金三郎、天明二年の銘あり。

二、「物産調」大正年間瓦製造業者

永坂李兵衛

永坂初太郎

長田栄治郎

榊原市松

石川千松

永坂坂太郎

石川源次郎

小沢真蔵

三、棚尾町商工会会員名簿 昭和八年

榊原松五郎

斉藤昇平

生田松太郎

長田栄治郎

永坂奎兵衛

石川源次郎

石川時次郎

永坂初太郎

榊原市松

### ある瓦屋の履歴

【杉浦金三郎】豊田市増慶寺の瓦が天明二年（一七八二）でもっとも古い。名古屋城内、松坂屋揚輝荘、半田市亀崎の浄願寺、碧南市大浜の本伝寺、同西方寺等にある。西方寺については別紙「地方史の話題」参照。永坂家瓦屋創業者奎兵衛の舅。文政十一年（一八二八）を最後に名が消える。二代にわたり金三郎を名乗った可能性が高い。

【永坂奎兵衛】六代（襲名）にわたり瓦製造をする。

第二代奎兵衛（宝暦七年～文政九年、一七五七～一八二六）。京都で瓦製造の技術を学ぶ。名古屋市東別院北隣の栄国寺に初期製作の鬼瓦がある。別紙「地方史の話題」参照。本伝寺には文政二年金三郎、斉藤吉助と共同製作の鬼瓦がある。また、碧南市棚尾の光輪寺には小形の鬼瓦がある。

第三代満真（寛政二年～明治元年、一七九〇～一八八五）。碧南市文化会館駐車場の隅に満真の鬼瓦がある。もとは大浜の海徳寺にあった。

第四代嘉平治（文化十三年～明治十八年、一八一六～一八八五）。高浜村板倉喜平の二男で、第二代奎兵衛の孫にあたる。明治五年棚尾村戸長となる。明治になって博覧会熱が

高まると、積極的に出品している。

第五代杵三郎（正勝、弘化四年～昭和三年、一八四七～一九二八）。棚尾村東正寺の石川賢瑞や京都の香川景嗣から和歌を学ぶ。藤沢の時宗本山清浄光寺再建のための瓦の製造にあたった。佐倉の堀田御殿（国指定重要文化財）の屋根の瓦は杵三郎の製作によるものである。（「地方史の話題」参照。）

第六代茂三郎（明治六年～昭和四十一年、一八七三～一九六六）。十二歳のとき京都へ遊学、十五歳のとき英学を志し、京都尚寧学校、同志社普通学校に学ぶ。帰郷後家業をつぎのちに村会（町会）議員となって村（町）政に寄与する。棚尾の秋葉神社が第二十二年解体され、茂三郎の製作した鬼瓦がみつかった。その鬼瓦は現在永坂杵兵衛家にある。第七代利貞（明治四十二年～平成元年、一九〇九～一九九四）。父茂三郎とともに瓦屋の経営にあたる。戦時中のきびしい時代に瓦屋を休業。昭和三十一年推されて市会議員に当選。四期十六年市政に寄与する。

【齊藤吉助】本伝寺に杉浦金三郎、永坂杵兵衛と共同制作の鬼瓦がある。また、棚尾の光輪寺にも塀を飾る細工物がある。

## 「加藤 平五郎」

### 1 要旨

北海道由仁（ゆに）町の開拓者である加藤平五郎は万延元年（1860）に棚尾村で生まれた。新川の本家に子供がなかったので翌2年に本家の嗣子として養育された。

最初は家業の農業に従事し、20歳の時大浜村役場に勤務。その後、岡本商会にスカウトされ、米津村や安城ヶ原の開墾を体験、35歳で北海道開拓を夢見て19人の同志と同町三川（みかわ）地区に入植した。

入植当初は冷害凶作が相次ぎ苦難を極めたが、2年後には三川駅を造り、簡易教育所、郵便局と町の基盤づくりに貢献した。死後、その功績をたたえ三川駅前に胸像が建てられた。

平五郎の開拓が縁で、昭和63年に碧南市と由仁町は青年友好都市提携を締結し、多くの市民が由仁町との交流を深めている。

### 2 加藤平五郎の年譜

三川の開拓に生涯を賭けた平五郎は、万延元年（1860）12月22日、愛知県碧海郡棚尾村（現、志貴町2-94）加藤平兵衛の5男として生まれた。その頃、本家（現在 碧南市鶴見町6丁目）加藤磯治郎に子供がなかったので、翌年本家の嗣子として移籍した。

以下、主な経歴を年代順に記す

- ・慶応3年（7歳）：精界寺の佐々木恵遠に初学を習う。
- ・明治5年（12歳）：鶴ヶ崎西光寺の清沢最天の塾に通って和漢学を収めた。
- ・明治13年（20歳）：大浜村役場に勤めた。
- ・明治16年（23歳）：岡本八右エ門は北大浜村が分村独立したのを機に、平五郎を番頭に迎えた。
- ・明治20年（27歳）：岡本八右エ門に見込まれ米津村岡野原に第一岡本農場を開設、支配人になる。

- ・明治 25 年（32 歳）：安城が原（現在の今村）に第二岡本農場を開設。
- ・明治 26 年（33 歳）：佐々木恵遠師の墓碑を個人で精界寺に建てる。
- ・明治 27 年（34 歳）：単身で北海道に渡り、現地を見て一旦帰る。
- ・明治 28 年（35 歳）：新婚早々の妻を携え、入植者 19 人と渡道。
- ・明治 30 年（37 歳）：三川駅開駅（北海道炭礦鉄道・現 J R 室蘭本線）
- ・明治 31 年（38 歳）：旧事務所を提供して私立三川簡易教育所を開設。
- ・明治 32 年（39 歳）：真宗本願寺派三川説教所を開設。
- ・明治 34 年（40 歳）：三川墓地を開設。
- ・明治 40 年（47 歳）：三川郵便局を設け、初代局長になる。
- ・大正 3 年（54 歳）：三川巡査駐在所を開設。
- ・大正 11 年（62 歳）：摂政宮殿下（昭和天皇）北海道行啓に際し、御召を受け、御下問を賜る。
- ・大正 14 年（65 歳）：4 月勲八等瑞宝章を授与。7 月 2 日逝去。
- ・昭和 5 年：功績を称え三川駅前に胸像が建立される。

### 3 関連事項

#### (1) 中根仙吉氏の人物評

「石狩の三河男児 加藤平五郎伝」の序文から抜粋

碧南の人々は、温和で勤勉、着実であるが、進取の気性に乏しいといわれている。その中であって、人造石発明の服部長七、芸術家藤井達吉、北海道開拓の加藤平五郎の三者は碧南の人としては桁外れの大人物といえよう。

#### (2) 碧南市内にある平五郎の史跡

精界寺にある佐々木恵遠師の墓碑（自然石造り）

#### (3) 参考文献

加藤平五郎翁資料全集	全 517 ページ	加藤平兵衛
実録 加藤平五郎伝		加藤平兵衛
石狩の三河男児 加藤平五郎の書簡		加藤良平
碧南市史料 第 45 巻 「碧南の著名人 2」		丹羽 清
碧南人物小伝 碧南市教育委員会	平成 22 年 12 月刊	

#### 4 姉妹都市、友好都市

平五郎の開拓が縁で、昭和 63 年（1988）4 月 5 日に由仁町と碧南市は、青年友好都市として提携を結んだ。

##### (1) 碧南市の姉妹都市、友好都市

海外 アメリカ ワシントン州 エドモンズ市 （姉妹都市）

クロアチア共和国 プーラ市 （姉妹都市）

国内 北海道夕張郡由仁町 （青年友好都市）

県内 愛知県豊田市小原地区（旧小原村）（スポーツ友好都市）

##### (2) 由仁町との交流状況

由仁町百足まつりに訪問団派遣。

碧南市の市民ふれあいフェスティバルで由仁町の特産品を販売。

訪問希望者は碧南市親善友好協会（事務局は市役所内）に会員登録し、審査を受ける。



